三陸国際芸術祭

SANRIKU INTERNATIONAL ARTS FESTIVAL

# SANRIKU INTERNATIONAL ARTS FESTIVAL MODEL TOUR REPORT

三陸国際芸術祭

SANRIKU INTERNATIONAL ARTS FESTIVAL

Edited by Sanriku International Arts Committee
Text by Kawano Momoko
Artwork by yamaneco graphics

Sanriku International Arts Festival 2022 REVIVE
- An FY 2022 Japan Cultural Expo Project Presented and Co-presented by Japan Arts Council and Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

日本博 JAPAN CULTURAL EXPO 心を、うごかそう。 Art Moves Us All.

Organized by | Sanriku International Arts Committee, Japan Arts Council, and Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
Co-organized by | Hachinohe City, Hashikami Town, Hirono Town, Kuji City, Noda Village, Fudai Village, Tanohata Village, Iwaizumi Town, Miyako City, Yamada Town, Otsuchi Town, Kamaishi City, Ofunato City, Rikuzentakata City, Sumita Town, Sanriku Railway Co., Ltd., Japan Folk Performing Arts Association, NPO Iwate Arts Support Center, and NPO Japan Contemporary Dance Network
Cooperated by | NPO Shinsai Regain, imajimu LLC, Tohoku Cultural Property Video Research Institute, Minna no Shirushi LLC

青森県から岩手県にかけての三陸沿岸 700km を超える15市町村を舞台にした「三陸国際芸術祭 2022 彩」が、9 月から翌年 3 月まで開催されている。三陸国際芸術祭は、東日本大震災で大きな被害を受けた沿岸地域で 2014 年にスタート。アジアを中心に様々な郷土芸能団体や現代アーティストが訪れる祭典だ。今年度は、コロナ禍でのオンライン開催などを経てやっとの本格実施として、ようやく一般の観客を入れたイベントを開催することができた。メインイベントとして、鹿踊（ししおどり）や念仏剣舞（ねんぶつけんばい）、神楽、虎舞（とらまい）などが一堂に会する「三陸篝火芸能彩」、9 月 24 日に大船渡駅前の野外で 4 時間にわたって開催された。また、初の取組みとして、9 月 11 日には郷土芸能の若い担い手達にフォーカスした「三陸未来芸能彩」も開催し、子どもから若者達が芸能を超えて踊りをともにした。これら芸能をはじめ三陸をぜひ堪能してもらえたらと、オリジナルモデルコースを設定。地域の歴史・文化・観光を楽しむことで、より深く芸能を知ることができる「三陸国際芸術祭」ならではの旅程を辿った。

**Trip to Encounter**
**Rich and Colorful Folk Performing Arts**
**3Days and 2Nights**
**Sep.23rd(Fri, holiday)-25th(Sun)**
**Route: From Tokyo to Ichinoseki to Ofunato**

# 彩り豊かな芸能と出会う旅

## 2泊3日 東京―一関―大船渡コース

三陸の郷土芸能が、岩手県大船渡に集結した。9月に行われた三陸国際芸術祭のイベント「三陸篝火芸能彩」は三陸地域から7団体が出演する見どころたっぷりの郷土芸能の祭典であった。会場となる大船渡は、盛岡から車で2時間、公共交通機関を使うと4時間。遠方から訪れる人にはぜひ週末を利用して近隣の地域も楽しんでほしいと3日間のモデルツアーが組まれた。台湾からの旅行客向けにガイドをしている菅沼麗雯(レイブン)さんも同行し、東北の歴史と芸能をたっぷり覗いてみる。



6

7

8

## 一関・平泉を味わい尽くす

朝。降り立ったのは、岩手県最南部の一関市。この日は終日、一関を中心に歴史と観光を楽しむ。かつて一関から大船渡に伝わった郷土芸能もあり、翌日の「三陸篝火芸能彩」の前に土地の歴史や文化に触れることで、何百年も芸能が伝承されてきた三陸の風土を感じてみたい。

歴史観光の中心といえば、三陸の郷土芸能との関係が深い世界遺産「中尊寺」だ。平安時代後期に合戦で亡くなった霊を供養しており、現代に伝わる岩手県内の念仏剣舞や鎧剣舞もまた、源義経をはじめこの地で亡くなった者の供養を発祥としている。この日は、小雨にも関わらず老若男女でにぎわっていた。観光客にとっては一ノ関駅からバスで22分ほどで来られるのも嬉しい。ただ周辺には他にも見どころがあるので、できればレンタカーやタクシーでの移動がより楽しめそうだ。

旅といえば、大きな楽しみが郷土料理である。一関はなんといっても餅料理！一ノ関駅から徒歩15分ほどの「世嬉の一（せきのいち）酒造」は、日本酒はもちろんビールやコーラも製造している蔵元だが、レストランで味わえる「果報餅」「手延べはっと」などが美味しく楽しい。おすすめの「果報（かほう）餅膳」は9種の味の餅が並び、見た目も華やかだ。もちろんお腹がかなりいっぱいになるが、それでも箸が伸びてしまい、はしゃぎながらいつの間にか完食してしまった。敷地内にはお酒の博物館や文学館もあるほか、歴史的な建築に囲まれながら静かな中庭でお酒を味わえるところが、国内外の方から人気だそうだ。

世嬉の一酒造近くにある「京屋染物店」にも足を運んでみる。100年以上続く染物屋としての技術と、様々なオリジナル商品を生む若い社員達のアイデアが魅力。店内には、伝統の味わいと現代的なデザインが組み合わされた洋服のほか、ハンカチや手ぬぐいなど暮らしに寄り添う染物商品が並んでいる。とくに目をひいたのが「郷土芸能支援手拭い」。岩手の郷土芸能をもとにデザインされた手ぬぐいを購入すると、一部がコロナ禍で活動の危機に瀕する伝統芸能への支援となる。コンセプトもそうだが、なによりデザインの可愛さに惹かれ、即、購入を決めた。

一関で絶対にはずせないのが、国の名勝・天然記念物の「厳美渓（げんびけい）」だ。遠くまで見通せる景色と、山並みの繊細さに吸い込まれそう。ここの空飛ぶ「かっこうだんご」は絶対にいただきたい。木づちで板を叩くと、川向こうからだんごの入ったかごがロープを渡ってくる。お茶つきなのでその場で景色とともに味わえるのも美味しさを倍増させる。また、すぐ傍に「サハラガラスパーク」があり、約10万点もの国内外のガラス製品が展示販売されている。

## 三陸ブルータイルに願いを込めて

2日目は、本旅のメインイベントである「三陸篝火芸能彩」の開催地・大船渡市へ。BRT* で大船渡駅へ降り立つと、駅前広場では16時からのイベント会場設営準備中だ。まずはすぐ隣の「キャッセン大船渡」で腹ごしらえ。ここは飲食店や商店が並ぶ、東日本大震災の津波復興を目的とした商業エリアだ。

食後の散歩がてら、海岸沿いの防潮堤へ。ここでは9月23日～10月9日に、県内の小学生らが制作した「三陸ブルーラインプロジェクト」の展示が行われていた。美術家の井上信太さんが三陸の青い海をイメージしたブルーのモザイクタイル作品で、離れたところからも、防潮堤の壁面に浮かび上がるような鮮やかなブルーが見える。

2011年3月11日、この場所が津波に飲まれてしまったことを「忘れない」ために、そして「未来に繋ぐ」ために。この地域に心を寄せる人達が、一枚一枚タイルを貼っていき、ウォールアートが完成した。海面からの高さ7.5mに、生命の樹のように地面から空に向かって伸びるデザイン。かつての震災の規模がわかる津波の高さもタイルで描かれている――「1960年チリ5.5M、1896年明治三陸6.9M、2011年東日本9.6M」、青く、爽やかささえ感じるモザイクタイルで描かれたこの文字が、東日本大震災の津波の脅威を物語っている。そして、9枚のタイルをルービックキューブのように組み合わせたいくつもの正方形が防潮堤に沿って横に何メートルも続く。ひとつとして同じ配色はない。何人もの子ども達がそれぞれ組み合わせを考えたそうだ。一人ひとり、震災の体験やその向き合い方は違う。そこにいろんな思いや個性があることで、数ではなく“人間”がいるということが感じられる。

またこの防潮堤には「いわてアール・ブリュット巡回展2022」の作品も展示され、様々な人と人がウォールアートを通して繋がっているようすが感じられた。



9

※BRT
「バス高速輸送システム（Bus Rapid Transit/バス・ラピッド・トランジット）」のこと。東日本大震災で被災した JR 気仙沼線、大船渡線の復旧にあたり、線路があったところをバスの専用道にした路線。一般道に比べると渋滞もないため、スピーディに安全で便利な運転ができる。

### 三陸ブルーラインプロジェクト

「伝える・つなぐ・祈る」をテーマに、東日本大震災の記憶や自然と向き合うこと、地域を超えた文化を育むことを目的とし、三陸沿岸地域をブルーのタイルで繋ぐアートプロジェクト。年間5,000人以上の子どもたちと、表現の遊び空間を伝えるポストワークショップを提管している美術家井上信太氏を招き、大船渡市を中心とした子どもたち・地域住民とのワークショップでタイルアートを製作。その作品を、防潮堤など防災教育の重要性が高いスポットに期間限定で展示した。地域住民だけではなく、三陸を訪れる旅行者なども含め、皆で震災の記憶や自然への意識を高めながら、地域創生を目指す。「伝える・つなぐ・祈る」をテーマに、三陸一帯の結びつきや1000年後の未来にも大切に守り継がれる三陸のシンボルとして、距離と時間を超え人々の心を繋ごうとするプログラム。

### モデルツアーの旅程
東京 ― 一関 ― 大船渡コース

**1日目 9/23(金)**

8:48 ～　東京駅～一ノ関駅　(東北新幹線)

●一関

11:50 ～　一ノ関駅～中尊寺前
(岩手県交通イオン前沢行き)
中尊寺／世嬉の一酒造／京屋染物店

15:30 ～　一ノ関駅～厳美渓前
(岩手県交通　厳美渓線)

厳美渓／ガラスパーク

17:40 ～　厳美渓前～一ノ関駅
(岩手県交通 厳美渓線)

**2日目 9/24(土)**

●一関

10:17～　一ノ関駅～気仙沼
(JR 大船渡線気仙沼方面)

●大船渡

11:57～　気仙沼～大船渡駅
(JR 大船渡線 BRT 盛行)

13:30　キャッセン大船渡／
三陸ブルーラインプロジェクト展示／
いわてアール・ブリュット巡回展 2022

16:00～　三陸篝火芸能彩
(大船渡市防災観光交流センターおおふなぽーと)

20:30　閉会式　餅まきあり

**3日目 9/25(日)**

●大船渡

9:11～　大船渡駅～奇跡の一本松駅

10:00～　東日本大震災津波伝承館／
奇跡の一本松

12:30～　奇跡の一本松駅～
大船渡駅 JR 大船渡線
BRT(盛方面)

●盛岡

13:22～　大船渡駅～盛岡駅
(岩手県交通盛岡線)

19:14～　盛岡駅～東京駅(東北新幹線)

1 国の名勝天然記念物である「厳美渓」2 中尊寺金色堂 3「世界遺産平泉ポスト」中尊寺に伝わる国宝のお経のデザインを基調とした。平泉町内7カ所に設置。4 蔵元レストラン 世嬉の一 5 サハラガラスパーク 世界中の美しいガラス作品が満載。6 厳美名物「郭公（かっこう）だんご」7 一関の郷土料理「果報餅」8 郷土芸能応援商品「ヘンバイバライ手ぬぐい」9 全長350mにわたりタイルアート作品を期間限定で展示。大の散歩で通りかかった人や旅行者などが立ち止まり、タイルに書かれた詩や言葉に目を留めていた。10 防潮堤に貼り付けたタイルアート作品。花や鳥、魚などをモチーフに制作。11 ワークショップで制作したタイルアート作品を手に防潮堤の前で、大船渡市民の皆さんと美術家 井上信太さん（中央）で記念撮影。



11



10

## 芸能三昧、大船渡に集結！

夕方 16 時になると、チンドン屋の音色が響いた。大船渡の「チンドン寺町一座」だ。陽気なリズムで、街は今日のメインイベントが始まるワクワク感に包まれた。

三陸沿岸地域の数ある郷土芸能が集結するイベント「三陸篝火芸能彩」。三陸の郷土芸能は、5,700 ㎞を超える沿岸部に数百あるとも言われ、広く分布していることと、基本的には土着性が強いため、それぞれの土地に赴かないとなかなか見ることができない。三陸沿岸地域から神楽や虎舞、七福神など 7 団体を集め、一度に三陸の多彩な芸能文化に触れることができるのが、今回の大きな魅力だ。野外ステージ脇には篝火が灯され、夕日の中で揺らめいている。来場者には、特典として大船渡の銘菓「かもめの玉子」が配られた。また、近隣の店で使える特典チケットが当日のリーフレットに付いているのも嬉しい。イベント終了後にどのお店に行こうか、早くも気になってしまう。

しかし少しずつ雲行きが怪しくなり、残念ながら、開幕時間には小雨が降り始めてしまった。いったんステージ隣のおおふなぽーと（大船渡市防災観光交流センター）ピロティーへ案内されて雨をしのぐことに……。あわや中止か、と肩を落としそうになったところ、待ち望む熱気に後押しされるように、ピロティーで開会宣言が始まった。

1団体目は、岩手県田野畑村の「1菅窪鹿踊・剣舞」。出演者の一人が挨拶で「皆に見てもらえることが達成感になる」と話す。コロナ禍で活動のままならなかった芸能団体にとって、人前でお披露目できる場はとても貴重なのだ。野生の鹿のように角を振り回して勇猛果敢に踊る。鹿踊と剣舞が、素早く交互に入れ替わっていく。取り囲んでいた来場者からは大きな拍手が巻き起こった。

次は宮古市からやってきた「2牛伏念仏剣舞」。子どもから大人までの男性が、太鼓や笛の囃子にのって薙刀を振りかぶる。出演者が「斬り合いが激しいところをとくに見てほしい」と紹介するように、二人一組で刃を交えるシーンは迫力！観客が円になって取り囲むように鑑賞していたため、臨場感があり、熱気がこもる。途中、緊張のせいか周囲とズレてしまった演者がいた。しかし先輩のフォローもあり堂々と踊りきり、世代を超えて伝統を繋いでいく様が伺えた。

ここで「次の演目から本来の会場である野外ステージで行う」とアナウンスが入る。夕立の終わりを告げるように、空には虹がかかっていた。

薄暗くなりつつあるなか、ステージ横に篝火が灯される。ぼうっと恵比寿様の白い面が浮かびあがり、幻想的な雰囲気を醸し出すのは、普代村「3鵜鳥神楽」。恵比寿様の見せ場である鯛を釣るシーンでは、最前列に座って楽しそうに見ていた戸田公明市長（当時）がステージに呼ばれ、鯛を釣る役を演じ、客席は大いに盛り上がった。

釜石市の「4南部藩壽松院年行司支配太神楽」は、獅子舞のダイナミックな動きに圧倒される。すっかり暗くなった闇に浮かぶ獅子舞は、今にも襲いかかりそうで、本当に生きているようだった。

イベントのメインビジュアルにもなっている、陸前高田市の「5喜多七福神舞」は、人口減少やコロナによって活気を失っていたが、前年の三陸国際芸術祭 2021 にて踊りを披露したことがきっかけで再建の意志を固めた。もとは子どもだけで行う五穀豊穣・大漁祈願の踊りだが、今回は大人達が踊る。七福神が順番に前へ出て、ひょうきんに踊る様子が楽しく、軽快な拍子はなかなか耳から離れないほど心地よかった。

迫力満点な踊りを披露したのは、唯一の虎舞である大槌町の「6大槌町虎舞協議会」。二頭の虎がステージを飛んで跳ねて駆け回り、客席に向かって大口を開けると観客からは興奮の声が上がる。

最後は、地元・大船渡市「7仰山流笹崎鹿踊」だ。開始前から客席には声援が飛ぶ。2.8 メートルもある「ささら」を背負い、太鼓のリズムでテンポ良く足を踏む姿は、野山を駆ける鹿の群れのようだ。8 頭の鹿が円陣を組んでくるくると踊る軽快な踊りは、クライマックスを大いに盛り上げた。

最後、紅白の餅投げでめでたい熱気のなか、5 時間近くにおよぶ「三陸篝火芸能彩」は終演した。

**三陸篝火（かがり）芸能彩**
日時｜2022 年 9 月 24 日（土）
16：30 ～ 21：00
会場｜大船渡市防災観光交流センター
おおふなぽーと
多目的広場（岩手県大船渡市）

数ある三陸沿岸の郷土芸能から、彩り豊かな 7 団体が篝火のなか演舞を披露する芸能見本市（ショーケース）プログラム。北は普代村、南は陸前高田市までの芸能を一度に楽しめる芸能祭は本芸術祭だけ。また、会場では本芸術祭で長年交流してきたインドネシアのジャワ舞踊の貴重な作品も上映。はるか昔から三陸に脈々と続いてきた芸能の数々は、豊作祈願の農民の予祝や、鎮魂、神への奉納として人々の生活に深く根付き、大切に受け継がれている唯一無二の芸術。日本が世界に誇る文化の一つである。

## 忘れえぬ、震災のあの日

最終日、BRT に乗って陸前高田市の「奇跡の一本松駅」へ。駅の前の真新しい建物は、「東日本大震災津波伝承館　いわて TSUNAMI メモリアル」だ。2019 年 9 月にオープンし、津波や地震について、歴史、被災の記録、当時の被災者がどう感じどのように行動したのか、政府など支援機関がどのように対応したのか、それらの成果や検証、そして全国から届いた声などが、膨大な記録とともに展示されている。もし未来に自分が被災したならばどう行動すればいいのか具体的なイメージが浮かびやすい展示には、「二度とこの悲しみを繰り返さないために」という願いが、切実な形となって込められていた。

この「東日本大震災津波伝承館」から一直線に、南へ向かって道が伸びる。その先の階段をのぼると、やっと一面に広がる海が見えた。海に向かって花が供えられており、右手には津波に耐えた「奇跡の一本松」が立つ。この日は小雨が降る中でも、幾人もの人が入れ替わり立ち替わり海岸沿いまでやってきて、静かに海を眺めていた。雨が静かにいろんな音をかき消す。「あの日」も雪が降っていた。

こうして観光、芸能、震災と盛りだくさんな大船渡の旅は終わりを迎えた。世界遺産や津波の跡など、土地に刻まれた歴史の足跡を知ることで、三陸各地から集まった郷土芸能の鑑賞体験がよりいっそう深く溶け込むような 2 泊 3 日だった。



↑奇跡の一本松。震災遺構で、高田松原の約 7 万本の松が流された中、唯一耐え残った復興のシンボル。
←東日本大震災津波伝承館。一帯が高田松原津波復興公園となっている。



### ツアーレポーターコメント

菅沼麗雯（レイブン）さん 台湾出身

日本は台湾からの観光客も多く、大都市などを訪れることもありますが、私の目には都会はどこも似た風景に映ります。しかしここ三陸は、独自の文化を持ち静かに過ごすことができるので、「日本に来た」という実感を持つことができます。今回の「三陸篝火芸能彩」で三陸の多彩な郷土芸能を間近で鑑賞したことは、「日本の伝統文化を身近に体感する」という今までにない旅の価値をもたらしてくれました。また、近代的な舞台作品を見るのとは違い、夕闇の中、篝火に照らされた郷土芸能の演舞やお囃子はとても幻想的でした。それはまさに古来より三陸地域の人々が伝えてきた芸能の姿をそのまま追体験しているようで、これだけでも大船渡を訪れる価値はあると感じました。まだコロナ禍で海外からの観光客数は回復していませんが、今後インバウンドにおいて、他のイベントと一線を画す「三陸篝火芸能彩」のような企画があれば、外国人の目にはとても魅力的に映るのではないでしょうか。

1 ©Daici Ano

2

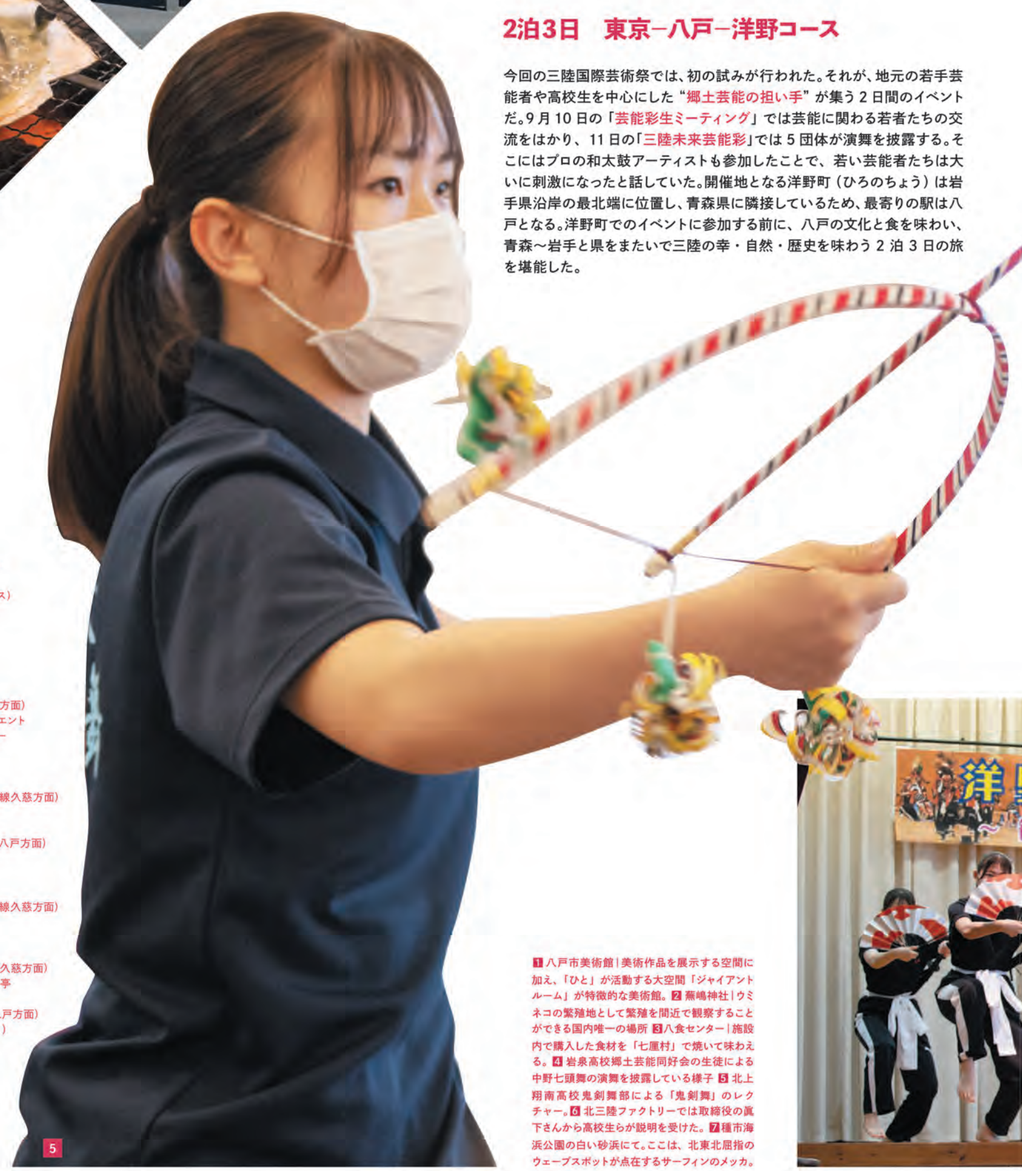
3

**Trip to Meet Young Practitioners of Folk Performing Arts**
**3Days and 2Nights**
**Sep. 9th(Fri)-11th(Sun)**
**Route:**
**From Tokyo to Hachinohe to Hirono**

# 若き芸能者と出会う旅

## 2泊3日　東京−八戸−洋野コース

今回の三陸国際芸術祭では、初の試みが行われた。それが、地元の若手芸能者や高校生を中心にした“郷土芸能の担い手”が集う2日間のイベントだ。9月10日の「芸能彩生ミーティング」では芸能に関わる若者たちの交流をはかり、11日の「三陸未来芸能彩」では5団体が演舞を披露する。そこにはプロの和太鼓アーティストも参加したことで、若い芸能者たちは大いに刺激になったと話していた。開催地となる洋野町（ひろのちょう）は岩手県沿岸の最北端に位置し、青森県に隣接しているため、最寄りの駅は八戸となる。洋野町でのイベントに参加する前に、八戸の文化と食を味わい、青森〜岩手と県をまたいで三陸の幸・自然・歴史を味わう2泊3日の旅を堪能した。



5

### モデルツアーの旅程
東京−八戸−洋野コース

**1日目 9/9（金）**
9:08 〜　東京駅発〜八戸駅着（東北新幹線）
●八戸
13:00 〜　八食センター（八食センター専用バス）
15:30 〜　八戸市美術館／ブックセンター／はっち／マチニワ
18:00 〜　みろく横丁

**2日目 9/10（土）**
●八戸
9:37 〜　八戸駅発〜鮫駅着（JR八戸線久慈方面）
10:00 〜　蕪嶋神社／八戸市水産科学館マリエント
11:30 〜　種差海岸インフォメーションセンター
12:30 〜　種差海岸トレッキング←おすすめ

●洋野
15:01 〜　種差海岸駅発〜種市駅着（JR八戸線久慈方面）
16:00 〜　芸能彩生ミーティング（洋野町文化会館セシリアホール）
19:02 〜　種市駅発〜本八戸駅着（JR八戸線八戸方面）

**3日目 9/11（日）**
●八戸
6:13 〜　本八戸駅発〜陸奥湊駅着（JR八戸線久慈方面）
7:40 〜　館鼻岸壁朝市

●洋野
9:44 〜　陸奥湊駅発〜種市駅着（JR八戸線久慈方面）
10:40　ひろの水産会館ウニーク／はまなす亭
13:00 〜　三陸未来芸能彩（セシリアホール）
17:44 〜　種市駅発〜八戸駅着（JR八戸線八戸方面）
19:06 〜　八戸駅発〜東京駅着（東北新幹線）

4

1 八戸市美術館｜美術作品を展示する空間に加え、「ひと」が活動する大空間「ジャイアントルーム」が特徴的な美術館。2 蕪嶋神社｜ウミネコの繁殖地として繁殖を間近で観察することができる国内唯一の場所 3 八食センター｜施設内で購入した食材を「七厘村」で焼いて味わえる。4 岩泉高校郷土芸能同好会の生徒による中野七頭舞の演舞を披露している様子 5 北上翔南高校鬼剣舞部による「鬼剣舞」のレクチャー。6 北三陸ファクトリーでは取締役の眞下さんから高校生らが説明を受けた。7 種市海浜公園の白い砂浜にて。ここは、北東北屈指のウェーブスポットが点在するサーフィンのメッカ。

7

## 岩手県最北への玄関口・青森県八戸

八戸駅前のロータリーに、イカや魚のイラストが描かれたひときわカラフルなバスが停車している。「八食センター行き」のバスだ。「八食センター」とは、その場で食べられる魚市場のほか、たこ焼きなどのお店、乾物店、茶屋、お菓子屋、お土産など「八戸地場産品のすべてがそろっている！」という大きな市場だ。季節ごとの新鮮な食材が並び、牡蠣やホタテなどを七輪で焼くこともでき、せんべい汁などの郷土料理も食べられる、食道楽の楽園のようだ。八戸駅からバス代100円でこの楽園に来られるなんて、お得すぎる！

お腹を満たしたら、八戸の中心街へ。見どころが徒歩圏内にぎゅっと集まっているので、歩いて散策してみる。市役所近くの「八戸市美術館」は、2021年11月にオープンした。扉をくぐるとまだ新しい匂いが残り、高く白い大空間は心地が良い。展示やイベントに合わせて、可動式の棚やカーテン等で空間を自由に変えられる。また、トイレもいずれはしジェンダーフリーとなることを意識した設計になっており、様々な人が交わる可能性が詰まった建築が魅力的だ。

商店街の方へ赴くと、ぜひ立ち寄りたいのが「八戸ポータルミュージアム はっち」。八戸のことを知らなくても、ここを訪れるといろんなことがわかる文化観光交流施設だ。1階にはイベントスペースや地元の作家や各観光地へ誘う紹介展示、2・3階は山海の幸や農産物、祭り、朝市、産業、芸能、スポーツなどあらゆる八戸の魅力が展示されている。その展示空間も、和を活かしたデザインで、半個室になっていたり、トンネルのようになっていたりと、展示を見るのに視界が変わるのも楽しい。さらに4階は地元作家の起業支援などを目的としたものづくりスタジオや製品販売スペースがある。5階はスタジオになっており、アーティストが創作をしたり宿泊したりできる。ロビーでは高校生が勉強出来るスペースなど、いろんな文化が交差しているミュージアムだ。

はっちの向かいにあるガラス張りの屋根付き広場「八戸まちなか広場 マチニワ」も、八戸の文化的な場所だ。若者達が座っておしゃべりをしていたり、イベントなどの多目的スペースとしても利用されている。マチニワを抜けると、「八戸ブックセンター」がある。入口を入ると、本屋なのに珈琲の香りが漂ってくる。小さなカフェスペースがあり、ゆっくり本を読むこともできるのだ。落ち着ける場所はそこだけではない。店内のいたるところに様々なデザインのソファーがあり、ハンモック席、畳敷きの三浦哲郎部屋など、お気に入りの場所を見つけられそうだ。ここで手に取り気に入った本は、きっと特別な本になる予感がする。さらには展示などのイベントも定期的に行われているほか、執筆専用のカンヅメプースがあり出版するまでの手伝いやワークショップもしているそうだ。しかも、なんと全国でも珍しいことに市が運営している。はっちも、マチニワも、ブックセンターも、市が文化を楽しむことを後押ししていて、何とも魅力的な街なので、ゆっくりと滞在したくなる。

日が暮れてくると、暖かな灯りのともる横丁へと惹かれてしまう。

八戸には昭和の風情漂う8つの横丁が残っており、小ぶりな居酒屋、ラーメン屋、スナック、エスニック料理店などが並ぶ。「みろく横丁」「たぬき小路」「ハーモニカ横町」「長横町れんさ街」……18時くらいからすでにほろ酔いの大人達が、テーブルをはさんで盛り上がっている。屋台をはしごしているらしき人たちが、すれ違いざまに「こんばんは」「ひさしぶり！」と挨拶を交わしている光景も。人のあたたかさ溢れる、地元の空気にどっぷりと浸っているうちに、居心の良い夜は更けていった。

## コロナ禍でやっと叶った、若き踊り手の芸能交流

2日目の朝。まだ日が高くないうちに行くおすすめな場所が、八戸駅から電車で20分ほどの「蕪島（かぶしま）海浜公園」だ。海岸沿いを歩いていくと、砂浜には昆布をとって籠に背負う漁の方や、犬の散歩をする家族連れなどがいる。砂浜が途切れた先の半島状のところが「蕪島」。青い空と海に、緑の島と、島の頂上にある「蕪嶋神社」の赤い鳥居が鮮やかだ。この神社は、弁財天を祀り、漁業安全や商売繁盛のご利益があると古くから信仰されている。また、ウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定されている蕪島では、約3万羽のウミネコが4月から7月末頃まで繁殖を行う。この期間はウミネコからフンをかけられることもあるので、貸し出されているふん避けの傘を差して蕪嶋神社に参拝することができる。

すぐ近くに「八戸市水産科学館マリエント」があり、八戸の水産について楽しく知ることができる。水槽の中には魚や亀が泳いでいて、ドクターフィッシュ体験も。さらには、世界に誇る地球深部探査船「ちきゅう」の研究データも展示されていて、大人にとっても子どもにとっても見どころがある。

そのほか、「種差（たねさし）海岸インフォメーションセンター」を発着としたトレッキングプログラム「種差海岸をガイドさんと歩こう！」もおすすめだ。地元ガイドさんとともに海岸エリアを約2時間、自分の足で歩くことで、種差海岸の新たな魅力を発見していく。地元の方の話を聞くことで、景色も色鮮やかになっていくのは旅のなかで出会う喜びのひとつである。

八戸から電車で約1時間、車では40分ほどで、岩手県洋野町へ入る。ここで三陸国際芸術祭 2022 彩のメインイベントのひとつである「洋と野に舞う三陸未来芸能彩・芸能彩生ミーティング」が開催される。

ミーティングに先立ち、交流会が行われた。郷土芸能の若い担い手が参加するため名を「洋野町未来交流ツアー」とし、岩手県内2校の高校生らが洋野町を巡る。メンバーは「岩手県立岩泉高等学校郷土芸能同好会」の19名と、「岩手県立北上翔南高等学校鬼剣舞部」の17名。いずれも2022年8月東京都で開催された「第46回全国高等学校総合文化祭東京大会郷土芸能部門」において、岩手県代表として出場し、ともに優良賞を受賞した全国トップレベルの高校生達だ。また、東北地方に古くから伝わる盆踊り“ナニャドヤラ”を踊る地元洋野町の「中野ふじの会」の人々が加わり、その3団体がまずは挨拶をかねてお互いの踊りを披露し、道具の説明や、簡単な踊りのレクチャーなどを行う。装束は着ていないが、太鼓や足踏みなどで地面が揺れ、その迫力に集まった人達が盛り上がる。また、リズムの取り方や基本姿勢など、ちょっとした違いが新鮮なようで、高校生達は「コロナ禍で、同世代の踊り手達との交流がないからすごく嬉しい」「他の郷土芸能に触れたのは初めて」と目を輝かせる。

互いの芸能をデモンストレーションした後は、バスに乗って種市海浜公園へ。この海辺には、洋野町の復興シンボルでもあるひろの水産会館「ウニーク」が建つ。外観は白い客船をイメージしており、海に向かって乗り出していく船を思わせる。館内に入ってまず目がいくのは、ウニだ。町内で水揚げされた新鮮な水産物の直売スペースで、ウニの群れがホヤを食べていた。夏にはウニの殻を割る体験もできるそうだ。ほかにも地元食材が味わえる軽食コーナーや、展望デッキからは一面に広がる太平洋が望める。

ウニークの向かいにある建物が、ウニなど北三陸の食材をPRする企業・北三陸ファクトリーだ。白い壁には紺色で、風見鶏ならぬ魚をかたどった風向計が描かれ、大きく「KITA-SANRIKU FACTORY（北三陸ファクトリー）」の文字が。一見おしゃれな雑貨店のようにも思える。そこで、同企業の取締役を務める眞下（まっか）美紀子さんが会社の取り組みなどを説明してくれた。震災後に「北三陸ファクトリー」というブランドを立ち上げ、ウニの養殖や、加工食品の開発、ぱっと目をひく広報アピールなど、地元の若者達に「うちの町は魅力的だな」と思われる取り組みを心がけている。眞下さん自身がUターンしていて、「地域には可能性がたくさんあるのに情報や魅力が発信できていない。若者に地場産業のことをもっと知ってもらい、活躍できる場になれば」と熱く語った。今回のイベントプログラムをプロデュースした三陸国際芸術祭ディレクター小岩秀太郎さん（全日本郷土芸能協会常務理事）※以下小岩さん　は「地元企業の話を聞くことで、郷土芸能と職業の関係や地元の未来についてとらえ直す発想の種にしてもらえれば」という狙いがある。若い担い手達は地域に根ざした芸能に関わっているからこそ、それぞれの地元を客観的に振り返ったことだろう。

「北三陸ファクトリー」の隣には、稚ウニを育てる施設や、自然の砂浜に覆われた海岸がある。最初は「砂だ……」と恐る恐る歩きだし、次第に全速力で波に向かって走り出した。中には裸足で「海だ！」と大はしゃぎしている生徒たちも。それもそのはず、どちらの高校も岩手県の内陸にあり、コロナ禍も重なって「海へ来たことがない」という高校生が何人もいたのだ。ひとしきり砂浜で騒いだ後は、海辺に腰かけ、洋野町の高校生が説明する『海のゴミ問題』に関するプレゼンテーションに耳を傾けた。町外から来た高校生達は「海にそんな課題があるなんて知らなかった」「同じ高校生が海のゴミの改善に取り組んでいてすごい」など、同世代の言葉を通して、洋野町の環境と自然について学んでいた。

6

**洋野町未来交流ツアー**
日時：2022年9月10日(土)13：00〜15：30
場所：中野漁村センター、北三陸ファクトリー（岩手県洋野町）

東日本大震災から復興し、先進的な取組みが顕著な洋野町を巡る、若者を対象とした交流型ツアー。町内の「北三陸ファクトリー」で起業・活躍する先輩から、地元で働こうと思ったきっかけや、地域への熱い思い、世界への発信など先進的な取組みを聞いた。また、「芸能」をともに受け継いでいる他の参加団体同士でレクチャーを行い、交流しながら学び、互いの芸能を理解し合う体験も。
実際に歩き、直に話を聞きながら交流することで、次世代を担う若者が、地元や地域および芸能への思いを新たにし、未来を考える機会とすることを目的に実施した。

## 芸能の未来は、地域とともに

16 時からは、一般の方も参加できる「芸能彩生ミーティング」が洋野町文化会館セシリアホール（コミュニティーホール）にて開催された。集まったのは、洋野町の様々な郷土芸能に関わる若手、岩手県で芸能に携わる 2 高校の生徒達、プロのアーティスト、地域づくりコーディネーターなど、地域・伝統・芸能に関わる人々だ。さらに一般参加者も合流し、芸能の魅力や未来について話し合う。

冒頭は、小岩さんによる郷土芸能のレクチャーから始まる。とくに『郷土芸能継承においての課題』は全国各地で様々な団体が直面している。後継者不足、指導者の高齢化、活動機会の減少や資金不足など、切実な問題だ。「芸能彩生ミーティング」では、これらの課題について考えるべく、異なる立場の登壇者が事例や活動を発表していく。

昼間に、海辺で高校生達に話をしてくれた、北三陸ファクトリーの眞下さんが、洋野町の地域資源の活用・活性化の事例についてレクチャーする。たとえば 2021 年にオープンした町の交流拠点施設「にぎわい創造交流施設 ヒロノット」。観光や人口拡大などを目的に、閉校した中学校を改修した施設で、イベントや宿泊ができる。そして、眞下さんにとっての大きな存在である地域おこし協力隊について。眞下さんはもともと洋野町の出身ではあるが、東京からＵターンしてきたことで、町の内側からと外側からの視点を持ち、洋野町をはじめ北三陸の発信を行ってきた。そのなかで、洋野町の地域おこし協力隊の方と連携して地域外の人を受け入れる体制を整え、新しい価値を生む活動をしてきた。また、洋野町では 2014 年から多世代が参加した地域づくりをしており、眞下さんも地元の高校生とのプロジェクトを通して未来の人財の育成に力を入れている。このようにＵターンして以降、地域の収入となる資源や、人口減少などの地域の課題に向き合ってきたのだ。それらはすべて、地域の郷土芸能の未来へも繋がっている。「芸能の未来を考えるためには、地域の経済や観光などの資源と可能性についても同時に模索しなければならない」という視点が刺さった。

イベントにゲスト参加する「ワールド太鼓カンファレンス（WTC）」のメンバーも、挨拶をかねて登壇した。WTC とは、海外から始まった太鼓愛好家などが集うイベントのこと。創作太鼓は約 70 年前に生まれた日本発祥の芸能として、世界中から人気を集めている。地域密着の郷土芸能とは違う形で、日本の伝統的な流れを汲んだ芸能に携わる 2 人のメンバーから、その活動の背景を聞いた。尾﨑真義さんは、大阪で高校教諭として働きながら和太鼓奏者として活動している。小池将也さんは、小学校で和太鼓に出会い、20 歳から佐渡島の「太鼓芸能集団 鼓童」のメンバーとして世界中で公演をしてきた。この 2 人の芸能人生は、これから高校を卒業して、郷土芸能との関わり方が変わっていくだろう高校生達の目にどう映っただろうか。新たな選択肢として、郷土芸能と自分にとっての新しい未来の可能性として、ヒントになったらと願う。

ミーティングの後半は、来場者全員で「郷土芸能ワークショップ」を行った。7 名ほどの 5 チームに分かれ、3 つのトピック（①私達の郷土芸能や地域の魅力、②それらを知ってもらうためには、③希望や未来）について アイデアを出し合う。異なる芸能に関わる高校生から 70 代まで様々な世代が集まっているため、どんな意見が飛び交うのか楽しみだ。郷土芸能や地域の魅力については「地域と芸能が繋がっている」「皆で盛り上がれる」「世代を超えて共通の帰れる場所になる」「応援してくれるのが嬉しい」など、それぞれが芸能に携わる理由が垣間見えた。ではその魅力をどうやって広めるかや未来に向けたアイデアは、若者から圧倒的に「SNS やネットでの配信」という声が多い。また「外部講演や老人ホームで公演する」「地元以外のお祭りやイベントに積極的に参加する」など披露する機会の創出を望むほか、「子どもに体験してもらい、自然と続けてもらう」「子ども達に憧れられる存在になる」という意見も。実際、参加した高校生の中には自分が物心ついた頃から芸能が身近にあったり、カッコいいからやってみたいと思ったりなどしたというエピソードもいくつかあがっていた。

アイデア出しのなかで盛り上がったのは、お互いの芸能を比べて「見せる踊りと、みんなで参加する踊りの、2 種類があるんじゃないか？」という話題だ。前日の交流会での互いの芸能のデモンストレーションを振り返ると、岩泉高校と北上翔南高校の 2 校が踊る芸能は本来の目的から離れてパフォーマンスの要素が強い。一方で洋野町の中野ふじの会が踊るのは盆踊り。老いも若きも地域の人も通りがかりの人も、誰でも一緒に円になって踊る。団体を超えて交流を行ったことで、高校生達は自分が携わる芸能の特徴や、他の芸能との違いを感じ、「見せる芸能なら、どうすればやりたいと思ってもらえるのか」「一緒に楽しむ芸能なら、どうやって足を運んでもらえばいいのか」など、芸能の種類や地域によってアプローチを変えるという俯瞰した視点で、広く『郷土芸能』の未来について考えられるワークショップだった。ここには洋野町の創作太鼓のメンバーも参加しており「創作太鼓と郷土芸能とはまたちょっと違うけど、若い人をはじめ様々な方の体験を聞けて、いろんな思いを持っている人達がいることを知りました。私達も思いを持ってパフォーマンスをしないと。それが芸能ってかっこいいという意識になっていくんだな」と刺激を受けたようだ。また、Ｕターンして郷土芸能に関わる大人達の話を聞けたことで、進学や就職で若者が地元を離れ継承が途切れる問題について、当事者である高校生は人生の進路に重ね合わせ「地元に芸能があるありがたみと嬉しさを感じた。やっぱり繋げていくことが大事」と新たに見えた未来があったようだ。それぞれの芸能の視点で意見交換ができた豊かな時間だった。

最後に、皆で踊れる芸能、中野ふじの会の盆踊り「ナニャドヤラ」の体験ワークショップを行った。シンプルなフレーズと振付で一見簡単そうだが、「自分の踊りと全然違う！」「足の動きがわからない！」と混乱しながらも楽しそうだ。踊り慣れている洋野町の人々のなかで、少しずつ振りを覚えて混ざっていく。皆、最終的には会場全体が太鼓と熱気に包まれた。その一体感こそが、芸能に参加することの喜びなのだろう。誰もに笑顔が浮かぶなかで、この日のイベントは終了した。

1 芸能彩生ミーティングでは北三陸ファクトリーの眞下さんから地域資源を活かすレクチャーを受けた。

**芸能彩生ミーティング**
芸能彩生ミーティング
日時：2022 年 9 月 10 日（土）16：00～18：00
会場：洋野町民文化会館セシリアホール コミュニティホール（岩手県洋野町）

芸能の宝庫といわれる三陸沿岸地域。数百にものぼる芸能が各地に伝わるが、その多くが継承の問題に直面している。
そこで、若手芸能者やプロのアーティストが集い、芸能の意義や未来を語り合うとともに、三陸地域に息づく創造性・可能性をシェアしながら仲間と思いを共有する交流ミーティングを洋野町で開催。先立って実施した洋野町未来交流ツアーに参加した地元起業家による「地域資源活用・活性化事例」の紹介、総勢約 70 名が 7 グループに分かれ、「郷土芸能や地域を広く知ってもらうには」「芸能や地域の未来と希望」などについて語り合った。

**洋野町教育委員会**
**生涯学習課 課長 コメント**
洋野町教育委員会 生涯学習課 課長
林下義則（はやした よしのり）さん
「伝統芸能は今、コロナ禍や若者の現象によって、未来がちょっと小さくなってきています。この貴重な財産を守っていけるイベントに元気をもらい、団体として伸びていくことが、町全体に広まってくれればと願っています。会場である洋野町民文化会館は、22 年前に若者が芸能や地域の文化を発展させながら交流していくことを掲げて建設されました。今後もその願いを込めて、芸能や新しい文化とともに人生を歩む人が増え、三陸が盛り上がれば嬉しい」と未来に願いを馳せていた。

## 3日目：多彩な芸能が、互いに刺激しあう場に

週末にこの地域を訪れたなら、ぜひ足を延ばしたい場所がある。青森県八戸市の巨大朝市「館鼻岸壁朝市（たてはながんべきあさいち）」だ。3～12 月の日曜の日の出から 9 時頃まで漁港で開催される、全長約 800m、300 店もの店が並ぶ日本最大級ともいえる朝市。新鮮な魚介類をはじめ、雑貨や骨董品、介護用品やトラックまで様々な物が売られている。その他、音楽ライブやご当地アイドルのステージもあり大賑わい。屋台では青森の特産品であるイカ、サバ、ホタテの炉端焼きや、八戸の干物やせんべい汁をテーブル席でゆっくり食べたり、焼きそばや焼きたてパンを食べ歩きしたり、東北の乾物や果物をお土産に買ったりと、多くの方が楽しんでいた。

イベント 2 日目にあたる「三陸未来芸能彩」は、洋野町文化会館セシリアホール（大ホール）にて、観客約 400 名（新型コロナウイルス感染症対策で客席を 2 分の1にして開催）の前で演舞を披露した。高校生 2 団体と洋野町の芸能 3 団体の計 5 団体、いずれも未来の担い手を中心とした若い出演者達が集まった。途中には、北上翔南高校が岩泉高校に自らの芸能をレクチャーする体験交流も設けられた。小岩さんは、オープニングスピーチにおいて「三陸国際芸術祭が 2014 年から始まるにあたって、三陸地域にこれほど多くの数と種類の郷土芸能があることに驚いた」と言う。とくに今回は、洋野町が新しい取り組みをするのにとても良い地域だと感じ、開催を決めたそうだ。「青い空と海、白い砂浜、かつ未来に向かっていろんな取り組みが地域で行われている事に感動しました。そこで、若い人達が稽古に携わっているので、若者中心のフェスティバルをやってみようかなと思いました」という熱い思いが実現し、未来を感じさせるラインナップとなっている。

演目はまず、創作太鼓のチーム「1 おおの鳴雷太鼓」が、迫力ある演奏で一気に観客を引き込む。この団体は 2000 年に創作太鼓講座を受講した青年たちにより結成され、現在は 5～46 歳までの計 28 人が活動している。鳴雷という名前は、洋野町大野（旧大野村）にある鳴雷神社にちなんだもの。この地域を代表する太鼓に成長し、村民に愛されるようにという願いが込められている。秋田県の劇団「わらび座」が作曲と演奏指導をし、強く鋭く情熱的なパフォーマンスを見せる。本番前の出演者は、コロナ禍でなかなか練習ができなかった悔しさをにじませつつも「コロナが落ち着いたら皆でここでもう 1 回やりたいという強い気持ちを胸に、今日は太鼓を叩きます」と久々のステージに強い思いを見せていた。その気合が太鼓を打つ手に込められ、客席を揺らしていく。

二番手は、北上翔南高校鬼剣舞部の「2 鬼剣舞」だ。全国高等学校総合文化祭で、文部科学大臣賞 1 回、文化庁長官賞を3回受賞する実力のある部である。黒や赤の鬼のような形相の仏の面をつけて出てきた部員達の堂々とした佇まいに、演舞が始まる前から舞台上の空気が変わる。剣を手に首を振りながら踊り始めると、鬼の恐ろしさと力強さ、大地と繋がるような大きな存在を感じさせる。足を上げて地面を踏みしめる動きが印象的だ。大地の悪霊を退散させて、天下泰平や五穀豊穣を祈る動きだそう。鬼剣舞とは、岩手県北上地方の農民に伝承する民俗芸能。約 1300 年前に始まったとされており、同部は、国指定重要無形民俗文化財「岩崎鬼剣舞」から指導を受けて活動している。3 年生の生徒は「面をつけると、口には穴がなくて、鼻と目もちょっとしか空いていないので呼吸はしづらいし、視界は狭いんです」と言うが、そういった大変さはまったく感じさせない力強い踊りを見せていた。そのほとんどが女子生徒だ。最後に鬼の面を外すと、その下からはまだあどけなさの残る高校生の顔が覗いた。

ここからは「次世代交流タイム」とし、4 種の踊りを披露した北上翔南高校鬼剣舞部がステージ上で、もう一つの参加校である岩泉高校の生徒達はじめ出演団体の皆さんに鬼剣舞の基礎的な振りをレクチャーする。さっきまで踊りを見ていた段階ですでに難しそうだが、実際に説明を受けると「ここでは足の甲の形を大事にしています」など、そんなところまで意識されているのかと驚く。コロナ禍で他校との交流がない数年間を過ごしていた高校生達にとって、この交流はとても嬉しい機会のようだ。「他の学校の人達がどうやって踊りを下級生に伝えているのか気になる」という声もあり、真剣に耳を傾け身体を動かしている。20 分という短い時間だったが、少しずつ振りを習得していく高校生達の様子を見守りながら、観客も手や足を動かしていた。

休憩をはさみ、後半の第一番手は「3 角浜駒踊り」。洋野町では地元小中学校で活発に伝承されており、今回の舞台でも小学生らが踊る。駒踊りは、戦国時代の戦いの様子や、人々にとって戦いや農耕の支えだった馬の霊を慰めるために踊ったものだと伝えられている。衣装は、「駒」と呼ばれる木製の馬の首とシッポの飾りを腰にくくりつけ、まるで馬にまたがっている姿になる。舞台上を踊り動くと、まさに乗馬をしているようだ。子ども達の踊りを見ていると、騎馬をして戦いを始める光景が浮かんできて、身近なことだったのだろうと感じられた。

続いて岩泉高校郷土芸能同好会の「4 中野七頭舞」。多くのメンバーが別の部活動に所属しており、1990 年の発足以降、全国大会 9 回、国立劇場 3 回、パリ公演などといくつもの実績を積み重ねてきた実力ある同好会だ。彼らが踊るのは岩手県宮古市に伝わる黒森神楽の「シットギジシ舞」を基本として創作されたと伝えられており、7 つの役割にわかれた踊り手が、7 種類の舞をすることから、その名も「七頭舞」とされている。道具ごとに踊りが違い、激しい踊り、軽快な踊り、ひょうきんな踊りなどと見ていて楽しい。踊り手の学生いわく「七頭舞は、止めるところは止めるし、しなやかなところはしなやかな踊り、見た人が笑顔になったり、感動してくれることがすごく嬉しいので続けたいです」と、勉強や部活と両立しながらも情熱をかける様子が感じられた。

トリは、観客席の洋野町民らにとっても慣れ親しんだ、中野ふじの会の「5 ナニャドヤラ」。ナニャドヤラは、岩手、青森、秋田に広く伝わる盆踊りで、日本最古ともいわれている。集落ごとに特徴があり、そのバリエーションはなんと数百種類だそうだ。なかでも「中野ふじの会」は、洋野町中野地区でも古くから親しまれてきたナニャドヤラを次世代に繋ぐために 2014 年に結成し、洋野町の魅力アップにも取り組んでいる。

フィナーレでは、これまでそれぞれの特色ある郷土芸能を披露してきた5団体全員が、ステージ上に幾重もの円を描いてナニャドヤラを踊った。中野ふじの会のメンバーは「ただただ楽しいから踊る」と言うが、あらゆる違いも個性も超えて、全員で笑顔で踊る様子は、祝祭そのものだ。その笑顔は客席にも広がり、大人も子どももナニャドヤラの節に合わせて手を動かし、会場一体が明るい雰囲気に包まれ、熱気のなかで「三陸未来芸能彩」は幕を閉じた。

**洋と野に舞う三陸未来芸能彩**
日時：2022 年 9 月 11 日（日）13：00～15：30
会場：洋野町民文化会館セシリアホール 大ホール（岩手県洋野町）
三陸の未来を担う若い芸能者にフォーカスし、芸能発表と共に芸能体験も取り入れた、これまでになかった芸能祭を提案。会場は、洋（海）と野（高原）に囲まれた自然豊かな岩手県洋野町。町内からは、戦国時代から伝承され今なお地元小・中学校で活発に踊られている角浜駒踊り、日本最古の盆踊りといわれるナニャドヤラ、5 歳から 46 歳までの幅広い年齢層で活動している和太鼓団体、若さ溢れる多彩な芸能 3 団体が出演。他に高校生芸能として三陸地域から岩泉町岩泉高校の中野七頭舞、北上市北上翔南高校の鬼剣舞、ともに 2022 年度全国高等学校総合文化祭郷土芸能部門で優良賞を受賞した岩手県トップレベルの芸能が集結。出演者による鬼剣舞体験や、ナニャドヤラ総踊りなども行った。

**ワールド太鼓カンファレンス（WTC）コメント**



小池将也（こいけ まさや）さん
「日本が持っている芸能の強みである『和』『輪』『仲間』を強く感じられるイベントでした。とくに交流の時間で、自分達の芸能をわかりやすく説明しようとしている気持ちと言葉から、好きなんだなという思いが伝わってきました。違う芸能の人が、お互いを尊重し合う姿に「皆が繋がってるんだな」と感じます。芸能団体にとって、交流の機会があまりないことは課題のひとつです。イベントだからこそ交流の時間がとれるので、もっと機会があるといいですね」

尾﨑真義（おざき まさよし）さん
「見るのとやるのでは難しさも楽しさも、まったく違う。ネットや SNS での発信は踊っている姿は「すごいな！カッコいいな！」と圧倒されます。その演者がすごく笑顔になって踊った瞬間に「一緒にやりたいな」と魅力を感じます。やっぱり、にっこり笑って、目と目が合って、お互いに励まし合って楽しさを共有し合うと、自分も踊りたいと思う人が増えると思う。さらに今回は、実際に体験する企画があることで、自分の芸能とは違う芸能を尊重できる良い機会でした」

Trip to Otsuchi,"Town of Folk Performing Arts"
3 Days and 2 Nights
Oct.14th(Fri)-16th(Sun)
Route:Tokyo to Morioka to Otsuchi

# おおつち「芸能のまち」と出会う旅

## 2泊3日　東京－盛岡－大槌コース

近年は、養殖サーモンの町としても知られるようになった岩手県大槌町。そして"芸能のまち"とも呼べるほど郷土芸能の層が厚く、神楽・大神楽・鹿子踊・虎舞など約 20 もの団体が活動している。今年 10 月に、大槌の食べ物や芸能が集まったイベントが開かれると聞いて、中国人留学生の賀さんとともに、ぜひにと足を運んだ。

### 自分好みにカスタマイズ！自転車の旅

大槌町は、三陸沿岸部のほぼ中央に位置し、盛岡から車で 1 時間 40 分の距離にある。「いろんなスポットを楽しみ倒すぞ！」という意気込みで、朝から挑んだのが「おおつちチャリクエ」。電動自転車を借り、撮影スポットや地元商店などに立ち寄りながらスタンプラリーのように大槌町を巡る体験プログラムだ。2022 年 4 月に始まったばかりのプログラムだが、定期的に利用客があり人気だ（要予約なので注意！）。ただの自転車貸し出しと違って、撮影スポット（最低4ヶ所）で撮った写真を集めたらプレゼントがもらえたり、手作り体験ができたり、あるポイントに行くとお土産がもらえたり、飲食店クーポンがついていたりと、自然と町の人と交流をしながら大槌を楽しめるシステムになっている。また、自転車なので、自分のペースで町巡りができるのも良い。

専用ＭＡＰを受け取り、「初心者だけど、がっつり大槌を楽しみたい！」とめぼしいコースをチェック。9 時には出発し、心地よい午前の日差しを浴びながら、海沿いを大槌湾港方面へと向かう。まず、最近整備された新港にある「波型の屋根付きベンチ」へ。周りには釣りを楽しむ人がちらほらといて、のんびりできる。ここは、後でプレゼントをもらえる撮影スポットのひとつなので、バシャリ。そこから 10 分ほどの、大槌の味覚がそろったお土産店「大槌孫八郎（まごはちろう）商店」※3月12日に大槌孫八郎商店は閉店いたしました。」へ。さまざまな食品や雑貨が並ぶ。ここはチャリクエのチケットと引き換えになにかがもらえるスポットだそうで……なんとおすすめ商品の「なんちゃってスモークサーモン」の試食ができ、燻製風味のタレに漬け込んだぷりぷりのサーモンに舌鼓をうった。さらに自転車で 5 分。大槌湾に浮かぶ「蓬莱島（ほうらいじま）」は、瀬戸内海にある瓢箪島とともに『ひょっこりひょうたん島』のモデルと言われる島のひとつ。たしかに離れて見ると、ひょうたんの形をしている。海を覗き込むと、底まで透き通る水質の良さと、ウニや鮮やかなヒトデの姿が楽しめた。ほか、絶滅危惧種であるイトヨが生息している「源水川（湧水）」へも。地元の方が「夏には梅花藻の白い花が咲くよ」と教えてくれた。7～ 8 月が見ごろだそうだ。

ランチは町の中心街で、自転車屋さんとカフェが隣接した「チャリカフェ」へ。ここ以外にも契約店ではチャリクエの飲食店クーポンが利用できるので、たとえば 500 円のカレーなら 0 円に !? 体に良いヘルシーなメニューもあり、自転車を漕いで運動をした後に、バランスの良い食事が体に染みる。また、近くの「菓子店エルマーノ」では、チャリクエのチケットと引き換えに焼きドーナツをもらうことができた。昭和 24 年に創業し、もとは冠婚葬祭用の和菓子・献菓子を販売していたエルマーノでは、今はケーキなどの洋菓子も扱っている。震災では店舗や道具がすべて流されてしまったが、再開した後に発売した蓬莱島をモチーフにしたクッキーなども人気だ。パッケージに書かれた「だけど僕らはくじけない♪」という『ひょっこりひょうたん島』のフレーズが胸に刺さる。どちらの店も、店員さんの温かな笑顔に嬉しくなった。

午後は、参加型の体験スポットへ。当日のスケジュールによって参加できる体験が違う。この日に訪れたのは、「おばちゃんくらぶのデコ鮭体験」。東日本大震災で被災した大槌のおばちゃん達が手作りした、白いヌード鮭に、リボンやボタンやビーズなどで自由にデコレーションをしてオリジナルの「デコ鮭」を作るハンドメイド体験だ。芸能人の篠原ともえさん、光浦康子さん、声優の高山みなみさんらも参加しており、個性あふれるデコ鮭が展示されている様子を見るだけでも楽しい。これらのデコ鮭は作った人が販売価格を決め、全国のいろんな場所で展示販売されているらしい。原価 200 円を超えた価格で売れると、その差額がおばちゃんくらぶの活動資金になる仕組みだ。となると、高く販売できそうなものを作りたくなる。しかし、くらぶのおばちゃんが優しくサポートしてくれるとはいえ、手芸に慣れていないとチャリクエの限られた時間内に納得のいくものを作るのは難しい。展示されているデコ鮭のユニークな魅力に圧倒されたこともあり、「悔しい！もっと時間があれば工夫できたのに！」という気持ちにもなる。しかし、諦めることなかれだ。白いヌード鮭シルエットを買えば全国どこからでも参加でき、国内では遠く沖縄から作ったデコ鮭を送ってくれた人もいる。このシステムには「生まれ育った川に帰ってくる鮭のように、仮設住宅に住む私たちも元の場所に帰れますように」といった願いが込められている。

と、盛りだくさんのおおつちチャリクエ。これでミッションはなんとかクリアし、プチ・プレゼントとして岩手オリジナルのマスキングテープをいただいた。プレゼントも体験も引換チケットも、その時々で内容が違うので、何度来ても大槌を楽しめるチャリ × クエストだった。

おおつちチャリクエの他に「神社・仏閣めぐり」もおすすめだ。大槌町は江戸時代、北は宮古市の一部から、南は釜石市までを管轄する「大槌通」として栄えていたといわれている。そのため有名な仏師や書家によるお宝が残されており、歴史好きにもたまらない。小鎚神社社殿をはじめ、由緒ある神社やお寺を巡るのも楽しいだろう。詳しく知りたい方向けには事前に予約すれば町内ガイドが案内してくれる（1 グループ 5000 円、約 2 時間）。知れば知るほど、歴史と魅力が詰まった町なのだ。

### 400年の歴史に触れる、大槌の鹿子踊

大槌町のいくつかの郷土芸能団体では、交流訪問の受け入れをしている（必ず事前にお問合せのこと）。

この日、訪問したのは「臼澤鹿子踊（うすざわししおどり）保存会」。活動拠点となる伝承館を訪ね、臼澤鹿子踊保存会前会長の東梅英夫（とうばい・てるお）さんにお話を伺った。臼澤鹿子踊は貞永時代に大槌に伝わり、400 年の積み重ねがある。東梅さんは 1945 年生まれ。終戦後は子どもが多く、同世代には鹿子踊を担う人材がたくさんいた。子ども達は「自分も踊りたい」と技を身につけるために頑張ったそうだ。1975 年頃から「皆で集まれる場所が欲しい！」と伝承館を建設する計画を立てた。自分達で図面を引き、建築していく。そのため完成までにかかった期間はなんと 20 年以上。1999 年にやっと開館の目途がたった。

しかしその間に、踊り手の後継者は少なくなっていった。なんとかしなければと、地域の子ども達だけを育てるのではなく、希望する人は誰でも受け入れ伝統を受け継ぐことにした。伝承館建設の熱意も伝わり、信頼を得ることができ、そのうちに関係者はなんと 120 人もの大所帯になっていく。賑ばいとともに、外の地区の人が多いことで体制としての脆さが不安でもあった。その懸念は的中する。2011 年の東日本大震災により、多くの人達がこの場所に足を運ばなくなってしまった。皆、それぞれの場所で被災してしまったのだ。

「文化を伝えよう」と少しずつ活動を再開していく中で、震災後にボランティアとしてカリフォルニアから来ていた 2 名のダンサーと知り合った。鹿子踊に興味を持った 2 人は大槌に滞在し、踊りだけでなく衣装の作り方も学んだ。さらに三陸国際芸術祭のパフォーマーとして再来日するなど、交流を深めていく。しかしコロナ禍のある時、カリフォルニアから連絡があり「家族が亡くなったため弔いの舞を踊ってほしい」というのだ。コロナの影響で活動ができなくなっていた臼澤鹿子踊だったが、その願いは聞き入れなければと、若いメンバー達がオンラインでカリフォルニアや他のいくつかの国を繋ぎ、鹿子踊を踊ることができた。鹿子踊が海を越えて人を繋いだ時間だった。「生きていたら、予想を超えることが起こる」と、東梅さんは振り返る。

また、鹿子踊の衣装を作るのに欠かせないドロノキという植物がある。だんだん育てる地域が減ってきて、近年では他の素材で代用している鹿子踊の団体も多い。しかし東梅さんらは「郷土芸能なのだから衣装も地場産でやりたい」と知人を介しご縁が出来た長野県信濃国分寺から育て方を教えてもらい、ドロノキを植樹して生産を始めることにした。育て始めてから、東梅さんは「これは子ども達の未来にとっても大事なことだよな」と気づいたと言う。踊りの技はもちろん、関わるモノづくりを次の世代に繋げていくこと。それは「自分達の土地でできるんだ」という自信にもなっていく。今の子どもたちが胸を張れる未来を作ることが、ひいては後継の存続と、伝統の継承になると考えている。

実際に、鹿子踊の衣装を着せていただいた。大きな鹿の頭から「重いのだろう」と想像していたが、予想よりも遥かに体力が必要だった。大きな鹿子頭を頭と顎で支え、首が折れないように全身の筋肉に力が入る。これで激しく踊るというのだから、想像しただけでムチ打ちになりそうだ。踊り手達の努力を垣間見たようで、だからこそ地域の大人達を見て「自分も踊りたい」と憧れるのだと強く納得した。

### モデルツアーの旅程

東京－盛岡－大槌コース

**1日目 10/14（金）**

12:20 ～　東京駅発～盛岡駅着（東北新幹線）
15:05 ～　盛岡駅発～大槌駅着（岩手県交通バス大槌行）

**2日目 10/15（土）**

●おおつちチャリクエ 4 時間（電動自転車）
大槌駅→波型の屋根付きベンチ→
孫八郎商店→蓬莱島→源水川（湧水）→
チャリカフェ→エルマーノ→
おばちゃんくらぶ「デコ鮭体験」
※このコースは一例です。

●大槌郷土芸能団体訪問　1 時間（要予約）

●大槌神社仏閣巡り　2 時間（要予約）

**3日目 10/16（日）**

9:00 ～　おおつち産業まつり　会場：海づくり記念公園
15:21 ～　大槌駅発～釜石駅着（三陸鉄道又はレンタカー）
15:57 ～　釜石駅発～新花巻駅着（JR 釜石線）
18:07 ～　新花巻駅発～東京駅着（東北新幹線）
18:16 ～　盛岡駅発～東京駅着（※レンタカーの場合、東北新幹線）

### 郷土の味・文化・技術を堪能する地元まつり！

コロナ禍で様々な祭が中止となってしまった。22 回まで続いてきた「おおつち産業まつり」も例外ではなく、2021 年に「おおつちまるごと復活まつり」として再開し、さらに今年もコロナ対策に力を入れて「第 24 回おおつち産業まつり」が開催された。大槌の食と文化が集まり、「食べる！見る！楽しむ！」とお祭りらしさが詰まった 1 日だ。

港にある海づくり記念公園には、朝から 30 軒以上のブースに人が集まり、大槌鹿、サーモン、海藻、柿や野菜、東北のワインなど大槌の秋の味覚が所せましと大賑わい。近隣の銭湯の割引券や、地元の社会福祉法人など、地域に根ざした出展が立ち並ぶ。

ステージ前には人が集まる。様々な大槌の団体が出演し、踊りを披露するのだ。一発目の「1 安渡虎舞」は、大人の演じる虎を子ども達が退治する舞を披露。青空の下で黄色い虎が舞う様子は華やかで、その迫力に見入ってしまう。最後、子ども達が虎を組み伏せて口上を述べる場面は爽快で、来場者からも温かい拍手が送られた。安渡虎舞は 1830 年代に大槌に伝承され、地域の皆で子ども達の育成を行ってきた。東日本大震災で被災後も「虎舞を復活し、地域の再生を図りたい」と装束などを揃えて活動を再開している。続く「2 浪板大神楽」は、太鼓や手平鉦（てびらがね）の音にあわせ獅子が舞う。赤い頭をつけた大きな獅子を、女の子が手懐けるようにリズムを取りながら率いていく。獅子舞の後には大人達の踊りがあり、和やかな祭の空気に包まれた。「3 上京鹿子踊」では、青や赤の頭に花の絵などを描いた鮮やかな鹿が、何体も頭を振り乱しながら踊る。剣を構えた少女達と対峙するシーンは、美しく力強い。ほかにも、雄鹿同士が雌鹿を奪い合ったり、戦いに勝った雄鹿と雌鹿が結ばれたりと、命や営みが感じられる踊りが多く、脈々と続く生命を感じた。

子ども達の七福神がめでたい「4 雁舞道七福神」は、テンポが速くて軽快さが楽しい。7 人が順番に前に出てきて踊るのだが、それぞれが堂々と見せ場を演じきり、継承に力をいれていることが伝わる。

ステージでは見ごたえのある芸能団体の踊りが続き、屋台にも人が溢れて会場は大賑わいだった。「○○さん！」「久しぶり」「どこからきたの？」などの挨拶が飛び交い、全身で大槌をどっぷりと味わう一日であった。

**第 24 回おおつち産業まつり**

日時：2022 年 10 月 16 日（日）　9：00～ 15：00
会場：海づくり記念公園（岩手県大槌町）
毎年行われる、大槌商工会主催のイベント。コロナ禍の 2021 年度復活を果たし、震災後新しく整備された「海づくり記念公園」で開催。大槌町の芸能は、神楽に大神楽、鹿子踊に虎舞と非常に豊富。1 つの町でもバラエティに富んだ芸能を楽しむことができる。その他、会場には移動動物園や、山の幸海の幸など 30 以上にものぼる出店が集まり、賑わいをみせた。その中には、「シカを町の財産に」を掲げ「大槌ジビエサイクル」に力を入れている「大槌ジビエ」、2022 年度ギンザケとトラウトサーモンの海面養殖が事業化された「岩手大槌サーモン」なども。この産業まつりは、毎年 9 月に行われる、大槌稲荷神社と小鎚神社の合同例大祭「大槌まつり」・「大槌サーモンまつり」に次ぐ大イベント。

1 臼澤鹿子踊（三陸国際芸術祭 2019 に出演した時の様子）
2 臼澤鹿子踊伝承館で衣装をつける体験をしている様子 3 ビーズなどで制作したデコ鮭作品 4「大槌まつり」で奉納が行われる「小槌神社」の社殿 5 源水川（湧水） 6「蓬莱島」大槌のシンボル的な島で、徒歩や自転車でも渡ることができる。

### ツアーレポーターコメント

賀 毅（ガ タケシ）さん　岩手大学在籍 中国人留学生

2017 年に初めて大槌町を訪れました。何よりも心に残っているのは、旧役場が被災したままの姿でそこにあることでした。そのあとに震災の動画を見た衝撃は言葉で表すことはできません。また留学生向けの交流企画で「臼澤鹿子踊伝承館」へ訪問し、日本の伝統文化に触れられたのが良い思い出です。

今回、5 年ぶりに大槌町へ来ました。再びの「臼澤鹿子踊伝承館」では鹿子踊の重い鹿頭や装束を身につけて、伝統を大切に守っていることをあらためて感じました。そして、大槌の町が綺麗になっていたことにびっくりしました。歩道が舗装され、観光客向けの店もたくさん開かれています。町の方々の元気な笑顔を見て心が温かくなりましたし、大槌町が少しずつでも着実に復興にむかっているようすも感じられました。ぜひ大槌町を訪れ、今の町の姿を感じていただきたいです。